

新約聖書における「救い」に関する一考察

大 宮 謙

1. はじめに¹

イエスを救い主と信じるキリスト教は、人を救う宗教であると言い得よう。そうであれば、活動場所が教会であれ、学校であれ、人を救うことが、キリスト教活動の根幹に据えられてしかるべきであろう。

一方、宗教主任として大学での務めに取り組む中で、果たして自分の働きは、人を救うことに貢献しているのでしょうか、との問いが折々に浮かんてくる。使徒パウロが「ともかく、何人かでも救う」(I コリ 9:22) という強い思いを持って活動していたことを踏まえれば、自らの働きを吟味する上でも、「何が人をどう救うのか」について改めて考察することに取り組む必要があるように思われる。すなわち「救い」についてのWhatとHowを明らかにすることである。

こうした問題意識を射程として捉えながら、本論では、キリスト教が語る「救い」について、新約聖書の用例を分析することとしたい。すなわち、新約聖書における「救い」の意味についての考察である。果たして新約聖書の示す「救い」が、現代を生きる我々にとって、どのような助けになるのかについての考察を深めていくための基礎作業として、今回の論考を位置付けたいと願うものである。

1 本論では特に明示しない限り、聖書の引用は聖書協会共同訳に拠る。

2. 新約聖書における「救い」に関連する各語の用例の分布

新約聖書において「救い」に関連する語としては、動詞σώζω「救う」、女性名詞σωτηρία「救い」、中性名詞σωτήριον「救い」、派生名詞σωτήρ「救い主」、形容詞σωτήριος「救いをもたらす」の五語を挙げ得よう²。用例数は、σώζωが106、σωτηρίαが46、σωτήριονが4、σωτήρが24、形容詞σωτήριοςが1である³。それぞれの語における文書ごとの分布を表にすると、次のようになる⁴。

表1 「救い」に関連する五語の文書ごとの分布（用例数）

	マタ	マコ	ルカ	ヨハ	使徒	ロマ	Iコリ	IIコリ	ガラ
σώζω	15	15	17	6	13	8	9	1	0
σωτηρία	0	1	4	1	6	5	0	4	0
σωτήριον	0	0	2	0	1	0	0	0	0
σωτήρ	0	0	2	1	2	0	0	0	0
σωτήριος	0	0	0	0	0	0	0	0	0
五語合計	15	16	25	8	22	13	9	5	0

	エフェ	フィリ	コロ	Iテサ	IIテサ	Iテモ	IIテモ	テト	フィレ
σώζω	2	0	0	1	1	4	2	1	0
σωτηρία	1	3	0	2	1	0	2	0	0
σωτήριον	1	0	0	0	0	0	0	0	0
σωτήρ	1	1	0	0	0	3	1	6	0
σωτήριος	0	0	0	0	0	0	0	1	0
五語合計	5	4	0	3	2	7	5	8	0

2 救いに関する類義語として、例えばρύομαι「救い出す」を挙げ得るが、今回はσώζωに関連する五語に絞って考察することとする。

3 ただし、σώζωの用例中のマコ16:16の1例およびσωτηρίαの用例中のマコ16:8異読の1例は、本文批判上は後代の加筆と見なされる。

4 表1では用例数を明示し、表2では全体を100%とした時に、それぞれの文書における用例が占める割合を明示した。なお、表2では小数点第2位まで示しているが、端数の関係で合計が100%にならない場合がある。

	ヘブ	ヤコ	Iペト	IIペト	Iヨハ	IIヨハ	IIIヨハ	ユダ	黙示
σῶζω	2	5	2	0	0	0	0	2	0
σωτηρία	7	0	4	1	0	0	0	1	3
σωτήριον	0	0	0	0	0	0	0	0	0
σωτήρ	0	0	0	5	1	0	0	1	0
σωτήριος	0	0	0	0	0	0	0	0	0
五語合計	9	5	6	6	1	0	0	4	3

表1および表2から主に読み取り得ることとしては、以下の点を挙げ得よう。

1) ガラテヤの信徒への手紙、コロサイの信徒への手紙、フィレモンへの手紙、ヨハネの手紙二、三の5つの文書では、「救い」に関する五語について、用例を全く欠く⁵。

2) σῶζωに関して、マタイ福音書（15例、14.15%）、マルコ福音書（15例、14.15%）、ルカ福音書（17例、16.04%）および使徒言行録（13例、12.26%）には、ほぼ同程度の用例数を認め得る。これらの4つの文書で用例は60例、56.6%を占める。一方、ヨハネ福音書の用例（6例、5.66%）は、比較的少ないと言い得よう。また、4つの福音書合計で用例は53例となり、全用例106のちょうど半分、50%を占める。

表2 「救い」に関連する五語の文書ごとの分布（%）

	マタ	マコ	ルカ	ヨハ	使徒	ロマ	Iコリ	IIコリ	ガラ
σῶζω	14.15	14.15	16.04	5.66	12.26	7.55	8.49	0.94	0
σωτηρία	0	2.17	8.7	2.17	13.04	10.87	0	8.7	0
σωτήριον	0	0	50	0	25	0	0	0	0
σωτήρ	0	0	8.33	4.17	8.33	0	0	0	0
σωτήριος	0	0	0	0	0	0	0	0	0
五語合計	8.28	8.83	13.81	4.41	12.15	7.18	4.97	2.76	0

5 それぞれの文書に、ここで分析対象とする五語とは異なる語の中で、「救い」に関連する語が認められ得るかどうかは、別途検討が必要であろう。

	エフェ	フィリ	コロ	Iテサ	IIテサ	Iテモ	IIテモ	テト	フィレ
σφζω	1.89	0	0	0.94	0.94	3.77	1.89	0.94	0
σωτηρία	2.17	6.52	0	4.35	2.17	0	4.35	0	0
σωτήριον	25	0	0	0	0	0	0	0	0
σωτήρ	4.17	4.17	0	0	0	12.5	4.17	25	0
σωτήριος	0	0	0	0	0	0	0	100	0
五語合計	2.76	2.2	0	1.65	1.1	3.86	2.76	4.41	0

	ヘブ	ヤコ	Iペト	IIペト	Iヨハ	IIヨハ	IIIヨハ	ユダ	黙示
σφζω	1.89	4.72	1.89	0	0	0	0	1.89	0
σωτηρία	15.22	0	8.7	2.17	0	0	0	2.17	6.52
σωτήριον	0	0	0	0	0	0	0	0	0
σωτήρ	0	0	0	20.83	4.17	0	0	4.17	0
σωτήριος	0	0	0	0	0	0	0	0	0
五語合計	4.97	2.76	3.31	3.31	0.55	0	0	2.2	1.65

同じくσφζωに関して、書簡の中では、ローマの信徒への手紙（8例、7.55%）、コリントの信徒への手紙一（9例、8.49%）に用例が多くみられる。ただし、この2文書は書簡の中では比較的文章量の多いものであり、文章量の比較的小さいものの中では、テモテへの手紙一（4例、3.77%）、ヤコブの手紙（5例、4.72%）の用例数も注目値するように思われる⁶。一方、1）で挙げた5つの文書に加えて、フィリピの信徒への手紙、ペトロの手紙二、ヨハネの手紙一、ヨハネの黙示録の4つの文書もσφζωの用例を欠く。従って、新約聖書27文書の中で、3分の1に当たる9文書でσφζωの用例を欠くことになる⁷。

3) σωτηρίαに関しては、ルカ福音書（4例、8.7%）、使徒言行録（6例、13.04%）の用例数が目立つ一方、マタイ福音書（0例）、マルコ福音書（1例、2.17%）、ヨハネ福音書（1例、2.17%）の用例数は極めて限られている。書簡の中では、用例数の多い順に、ヘブライ人への手紙（7例、15.22%）、ローマ

6 ローマの信徒への手紙、コリントの信徒への手紙一の両者は16章から成る一方、テモテへの手紙一は6章、ヤコブの手紙は5章から成る。

7 註5参照。

の信徒への手紙（5例、10.87%）、コリントの信徒への手紙二およびペトロの手紙一（4例、8.7%）である。

4) σωτήριονに関しては、全4例の中でルカ福音書が2例、使徒言行録およびエフェソの信徒への手紙が1例ずつである。従って、「ルカ文書」（ルカ福音書および使徒言行録）が4例中3例を占める。

5) σωτήρに関しては、ルカ福音書および使徒言行録（2例、8.33%）に散見され、ヨハネ福音書にも認められる（1例、4.17%）。一方、マタイ福音書およびマルコ福音書は用例を欠く。書簡の中では、用例数の多い順に、テトスへの手紙（6例、25%）、ペトロの手紙二（5例、20.83%）、テモテへの手紙一（3例、12.5%）である。

6) σωτήριοςに関しては、テトスへの手紙の1例のみである。

7) 五語の用例数の合計では、多い順に、ルカ福音書（25例、13.81%）、使徒言行録（22例、12.15%）、マルコ福音書（16例、8.83%）、マタイ福音書（15例、8.28%）であり、ヨハネ福音書（8例、4.41%）は、それらの中では、用例数がかなり少ないと言い得る⁸。一方、書簡では、五語の用例数の合計では、多い順に、ローマの信徒への手紙（13例、7.18%）、コリントの信徒への手紙一およびヘブライ人への手紙（9例、4.97%）、テトスへの手紙（8例、4.41%）、テモテへの手紙一（7例、3.86%）である⁹。さらに、「ルカ文書」は、用例全体の1位、2位を占め、両者を合わせると47例、25.96%に及ぶ。

3. 新約聖書における「救い」に関連する各語の用法

前章で明らかとなった、「救い」に関連する五語の文書ごとの用例の分布を踏まえて、次に、各語の用法について、さらに分析を進めたい。本章では、動

8 ただし、マタイ福音書の用例は全てσώζωであり、マルコ福音書の用例もσώζωが15例、σωτηρίαが1例で、ほぼ前者（σώζω）の用例である。

9 ただし、コリントの信徒への手紙一の用例は全てσώζωであり、ローマの信徒への手紙、ヘブライ人への手紙も用例はσώζωとσωτηρίαの二語のみに認め得る。

詞については、各文書における用例を能動形、受動形それぞれに分類した上で、それぞれの主語、目的語および「状況変化」について集計することとする¹⁰。また、名詞、形容詞については、各文書における用例を、主格、属格、与格、対格に分類して分析することとする。

3-1 σόζω

マコ16:16の1例を含む新約聖書の用例106の中で、能動形は51例、受動形は55例で、ほぼ同数であるが、文書によって偏りがある場合もある¹¹。

マタイ福音書の15の用例の中で、能動形は9例¹²、受動形は6例¹³である。能動形の主語はイエスが6例¹⁴、他は「あなたの信仰」(9:21)、人全般 (16:25)、エリヤ (27:49) が1例ずつである。一方、受動形の意味上の主語は、神とイエスに限られ、前者が4例¹⁵、後者が2例¹⁶である。

能動形の目的語は、イエスが3例¹⁷、「彼 (=イエス) の民」、私たち (=弟子たち)、「あなた (=長血の女)」、私 (=ペトロ)、「自分の命」、他人がそれぞれ1例である¹⁸。一方、受動形の目的語は、「長血の女」、「最後まで耐える者」

10 主語、目的語が明示的でない場合については、文脈から判断する。「状況変化」とは、「何から」あるいは「何への」救いであるかを指す。こちらも明示的でない場合は文脈から判断する。

11 例えば、能動形の用例のみの文書には、テモテへの手紙二、テトスへの手紙、ヘブライ人への手紙、ヤコブの手紙、ユダの手紙の5つがある。一方、受動形の用例のみの文書も、使徒言行録、コリントの信徒への手紙二、エフェソの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙一、二の5つであり同数である。

12 マタ1:21、8:25、9:21の2番目、14:30、16:25、27:40、42の2つとも、27:49。

13 マタ9:21の1番目と3番目、10:22、19:25、24:13、22。

14 マタ1:21、8:25、14:30、27:40、42の2つとも。

15 マタ10:22、19:25、24:13、22。

16 マタ9:21の1番目と3番目。

17 マタ27:40、42の2番目、27:49。

18 順に、マタ1:21、8:25、9:21の2番目、14:30、16:25、27:42の1番目。

がそれぞれ2例¹⁹、他は、誰、「全ての人」がそれぞれ1例である²⁰。

能動形の状況変化は、「死から」が7例²¹、「罪から」、「病から」が1例ずつである²²。一方、受動形の状況変化は、「神の裁きから」が3例²³、「病から」が2例²⁴、「天の国への」が1例である²⁵。

マルコ福音書の15の用例の中で、能動形は8例²⁶、受動形は7例²⁷である。能動形の主語はイエスおよび人全般が3例ずつ²⁸、他は「あなたの信仰」（5:34、10:52）が2例である。一方、受動形の意味上の主語は、神とイエスに限られ、前者が4例²⁹、後者が3例³⁰である。

能動形の目的語は、命が3例³¹、イエスが2例³²、他は「あなた（＝長血の女）」、「あなた（＝盲人バルトロマイ）」、他人がそれぞれ1例である³³。一方、受動形の目的語は、「ヤイロの娘」、「長血の女」、「イエスの衣の裾に触れた者」、誰、「最後まで耐える者」、「全ての人」、「信じて洗礼を受ける者」が、それぞれ1例である³⁴。

19 前者は、マタ9:21の1番目と3番目、後者は10:22と24:13。後者を聖書協会共同訳は「最後まで耐え忍ぶ者」と訳す。

20 順に、マタ19:25、24:22。後者を聖書協会共同訳は「誰一人」と訳す。

21 マタ8:25、14:30、16:25、27:40、42の2つとも、27:49。8:25は「嵐の危険から」、14:30は「溺死から」、27:42の1番目は「死、病、苦しみから」とも解し得る。

22 前者は、マタ1:21、後者は9:21の2番目。

23 マタ10:22、24:13、22。

24 マタ9:21の1番目と3番目。

25 マタ19:25。

26 マコ3:4、5:34、8:35の2つとも、10:52、15:30、31の2つとも。

27 マコ5:23、28、6:56、10:26、13:13、20、16:16。聖書協会共同訳は5:28を「治して」、6:56を「癒やされた」と訳す。

28 前者はマコ15:30の3つとも、後者はマコ3:4、8:35の2つとも。

29 マコ10:26、13:13、20、16:16。

30 マコ5:23、28、6:56。

31 マコ3:4、8:35の2つとも。ただし、8:35の2つは「自分の命」。

32 マコ15:30、31の2番目。

33 順に、マコ5:34、10:52、15:31の1番目。

34 順に、マコ5:23、28、6:56、10:26、13:13、20、16:16。聖書協会共同訳は13:13を「最後まで耐え忍ぶ者」と訳す。

能動形の状況変化は、「死から」が6例³⁵、「病から」が2例である³⁶。一方、受動形の状況変化は、「病から」、「神の裁きから」がそれぞれ2例³⁷、「死から」、「天の国への」、「罪から」がそれぞれ1例である³⁸。

ルカ福音書の17の用例の中で、能動形は12例³⁹、受動形は5例⁴⁰である。能動形の主語は、イエスが5例で最も多いが⁴¹、他の福音書と比して特徴的なのは、「あなたの信仰」が4例と突出していることである⁴²。他は人全般が3例である⁴³。一方、受動形の意味上の主語は、神とイエスに限られ、前者が3例⁴⁴、後者が2例⁴⁵である。

能動形の目的語は、命、イエスがそれぞれ3例⁴⁶、他は「あなた（＝罪深い女）」、「あなた（＝長血の女）」、「あなた（＝癒やされたサマリア人）」、「あなた（＝ある盲人）」、「失われたもの」、他人がそれぞれ1例である⁴⁷。一方、受動形の目的語は、「道端のもの」、「悪霊に取り憑かれた人」、「ヤイロの娘」、人全般、誰が、それぞれ1例である⁴⁸。

35 マコ3:4、8:35の2つとも、15:30、31の2つとも。15:31の1番目は「死、病、苦しみから」とも解し得る。

36 マコ5:34、10:52。

37 前者はマコ5:28、6:56、後者はマコ13:13、20。

38 順に、マコ5:23、10:26、16:16。16:16は「裁きから」とも解し得る。

39 ルカ6:9、7:50、8:48、9:24の2つとも、17:19、18:42、19:10、23:35の2つとも、23:37、23:39。

40 ルカ8:12、36、50、13:23、18:26。

41 ルカ19:10、23:35の2つとも、23:37、39。ただし、19:10は語としては「人の子ὁ υἱὸς τοῦ ἀνθρώπου」である。

42 ルカ7:50、8:48、17:19、18:42。一方、マタイ福音書は1例、マルコ福音書は2例であり、ヨハネ福音書は用例を欠く。

43 ルカ6:9、9:24の2つとも。

44 ルカ8:12、13:23、18:26。

45 ルカ8:36、50。ただし、8:50は意味上の主語を神とも解し得る。

46 前者はルカ6:9、9:24の2つとも。ただし、9:24の2つは「自分の命」。後者はルカ23:35の2番目、23:37、39。ただし、23:39はイエスと我々（一緒に十字架に架けられた犯罪人たち）。

47 順に、ルカ7:50、8:48、17:19、18:42、19:10、23:35の1番目。

48 順に、ルカ8:12、36、50、13:23、18:26。

能動形の状況変化は、「死から」が7例⁴⁹、「病から」、「天の国への」がそれぞれ2例⁵⁰、「罪から」が1例である⁵¹。一方、受動形の状況変化は、「天の国への」が3例⁵²、「悪霊から」、「死から」、がそれぞれ1例である⁵³。

ヨハネ福音書の6の用例の中で、能動形は2例⁵⁴、受動形は4例⁵⁵である。能動形の主語は、神とイエスが1例ずつである⁵⁶。一方、受動形の意味上の主語も神とイエスに限られ、前者が3例⁵⁷、後者が1例⁵⁸である。

能動形の目的語は、「私（＝イエス）」、「この世界」がそれぞれ1例である⁵⁹。一方、受動形の目的語は、「この世界」、「あなたがた（＝ユダヤ人）」、「（イエスという）門を通して入る者」、「ラザロ」がそれぞれ1例である⁶⁰。

能動形の状況変化は、「この時（＝十字架で死ぬ時）から」、「神の裁きから」が1例ずつである⁶¹。一方、受動形の状況変化は、「永遠の命への」が2例⁶²、「神の裁きから」、「死から」が1例ずつである⁶³。

使徒言行録の13の用例は全て受動形で⁶⁴、能動形の用例を欠く。これらの受

49 ルカ6:9、9:24の2つとも、23:35の2つとも、23:37、39。23:35の1番目は「死、病、苦しみから」とも解し得る。

50 前者はルカ8:48、18:42、後者は17:19、19:10。17:19を「病から」とは解さない。癒やされた十人のうち、戻って来たサマリア人のみに「救い」が宣言されているからである。

51 ルカ7:50。

52 ルカ8:12、13:23、18:26。

53 順に、ルカ8:36、50。

54 ヨハ12:27、47。

55 ヨハ3:17、5:34、10:9、11:12。

56 前者は12:27（語としてはπάτερ「父」）、後者は12:47。

57 ヨハ5:34、10:9、11:12。

58 ヨハ3:17。

59 順に、ヨハ12:27、47。聖書協会共同訳は、12:47のτὸν κόσμονを「世」と訳す。

60 順に、ヨハ3:17、5:34、10:9、11:12。聖書協会共同訳は、3:17のτὸν κόσμονを「世」と訳す。

61 順に、ヨハ12:27、47。

62 ヨハ5:34、10:9。

63 順に、ヨハ3:17、11:12。

64 使徒2:21、40、47、4:9、12、11:14、14:9、15:1、11、16:30、31、27:20、31。

能動形の意味上の主語は、神とイエスに限られ、前者が9例⁶⁵、後者が4例⁶⁶である。目的語は多岐に渡り、人全般が3例⁶⁷、他は、「主の名を呼び求める者」、「足を癒された人」、「あなた（＝コルネリウス）と家族全員」、「足の不自由な男」、「あなたがた（＝兄弟たち）」、「私たち」、「私（＝看守）」、「あなた（＝看守）と家族」、「私たち（＝パウロとその同船者）」、「あなたがた（＝百人隊長と兵士たち）」がそれぞれ1例である⁶⁸。

状況変化については、「神の裁きから」が8例⁶⁹、「病から」、「死から」がそれぞれ2例⁷⁰、「この歪んだ時代」が1例である⁷¹。

ローマの信徒への手紙の8の用例の中で、能動形は1例⁷²、受動形は7例⁷³で、後者が圧倒的である。能動形の主語は、文脈から判断してパウロと解し得る。一方、受動形の意味上の主語は、神が4例⁷⁴、イエスが2例⁷⁵であり、他は「希望」（8:24）が1例である。本論の分析に拠れば、受動形の意味上の主語が神でもイエスでもない用例は、ここの「希望」の1例のみである⁷⁶。

能動形の目的語は、「彼ら（＝同胞）の何人か」の1例であり、受動形の目

65 使徒2:21, 40, 47, 11:14, 14:9, 15:1, 16:30, 27:20, 31。ただし、11:14は意味上の主語を「ペトロが語る言葉」とも解し得る。

66 使徒4:9, 12, 15:11, 16:31。ただし、4:9, 12の意味上の主語は、文脈から「イエス・キリストの名ὄνομα Ἰησοῦ Χριστοῦ」（4:10）であり、15:11の意味上の主語は「主イエスの恵み ἡ χάρις τοῦ κυρίου Ἰησοῦ」である。また、16:31は意味上の主語を神とも解し得る。

67 使徒2:40, 47, 4:12。ただし、4:12は文言上は「私たち」。

68 順に、使徒2:21, 4:9, 11:14, 14:9, 15:1, 11, 16:30, 31, 27:20, 31。

69 使徒2:21, 47, 4:12, 11:14, 15:1, 11, 16:30, 31。うち11:14, 15:11, 16:30, 31は「天の国への」とも解し得る。

70 前者は使徒4:9, 14:9、後者は27:20, 31。後者の2つは「溺死から」とも解し得る。

71 使徒2:40。

72 ロマ11:14。

73 ロマ5:9, 10, 8:24, 9:27, 10:9, 13, 11:26。

74 ロマ9:27, 10:9, 13, 11:26。

75 ロマ5:9, 10。ただし、5:10の意味上の主語は、「イエスの命τῇ ζωῇ αὐτοῦ（＝Ἰησοῦ）」である。

76 本章のまとめの部分（74頁）参照。さらに、註85をも参照。

的語は、「私たち」が3例⁷⁷、他は、「残りの者」、「あなた（＝人全般）」、「主の名を呼ぶ人」、「全イスラエル」がそれぞれ1例である⁷⁸。

能動形の状況変化は、「神の裁きから」が1例⁷⁹、受動形は、「神の裁きから」が5例⁸⁰、「怒りから」、「天の国への」が1例ずつである⁸¹。

コリントの信徒への手紙一の9の用例の中で、能動形は4例⁸²、受動形は5例である⁸³。能動形の主語は、神、妻、夫、パウロが1例ずつである⁸⁴。一方、受動形の意味上の主語は、全て神である⁸⁵。

能動形の目的語は、「信じる者たち」、夫、妻、「何人か」が1例ずつであり⁸⁶、受動形の目的語は、「私たち」、「その（＝仕事がかの日の火で燃え尽きた）人」、「その（＝サタンに引き渡された人の）霊」、人全般、「あなたがた」が1例ずつである⁸⁷。また、能動形の状況変化は、全て「神の裁きから」であり⁸⁸、受動形も、全て「神の裁きから」である⁸⁹。

コリントの信徒への手紙二の用例は受動形の1例のみで⁹⁰、意味上の主語は神、目的語は人全般である。また、状況変化は「神の裁きから」あるいは「滅びから」である。

エフェソの信徒への手紙の用例も受動形の2例のみで⁹¹、意味上の主語はいず

77 ロマ5:9, 10, 8:24。

78 順に、ロマ9:27, 10:9, 13, 11:26。

79 「天の国への」とも解し得る。

80 ロマ5:10, 9:27, 10:9, 13, 11:26。ただし、5:10は「怒りから」とも、10:9, 13, 11:26は「天の国への」とも解し得る。

81 順に、ロマ5:9, 8:24。聖書協会共同訳は、5:9のτῆς ὀργῆςを「神の怒り」と訳す。

82 I コリ1:21, 7:16の2つとも、9:22。

83 I コリ1:18, 3:15, 5:5, 10:33, 15:2。

84 順に、I コリ1:21, 7:16の1番目、2番目、9:22。

85 ただし、15:2の主語は「福音」とも解し得よう。

86 順に、I コリ1:21, 7:16の1番目、2番目、9:22。

87 順に、I コリ1:18, 3:15, 5:5, 10:33, 15:2。

88 I コリ7:16の1番目、2番目、9:22は「天の国への」とも解し得る。

89 I コリ10:33, 15:2は「天の国への」とも解し得る。

90 II コリ2:15。

91 エフェ2:5, 8。

れも神、目的語はいずれも人全般、状況変化はいずれも「神の怒りから」である⁹²。

テサロニケの信徒への手紙一、二とも用例は1つずつであり、いずれも受動形で、意味上の主語は神である⁹³。前者の目的語は異邦人、後者は「彼ら（＝滅びる者たち）」である。また、状況変化は、前者が「天の国への」、後者が「神の裁きから」あるいは「滅びから」である。

テモテへの手紙一の4の用例は、能動形、受動形とも、それぞれ2例である⁹⁴。能動形の主語は、イエス、「あなた（＝テモテ）」が1例ずつ⁹⁵、受動形の意味上の主語は、両者とも神である。能動形の目的語は「罪人たち」、「自分自身と、あなたの言葉を聞く人々」、受動形は「すべての人」、「女」である⁹⁶。また、状況変化は、能動形が、いずれも「神の裁きから」あるいは「滅びから」、受動形は、前者が「天の国への」、後者が「神の裁きから」である⁹⁷。

テモテへの手紙二の用例は能動形の2例のみで、主語は、神、イエスが1例ずつ⁹⁸、目的語は、私たち、私が1例ずつである⁹⁹。また、状況変化は、前者が「死から」、後者が「天の国への」である¹⁰⁰。

テトスへの手紙の用例も能動形の1例のみで¹⁰¹、主語は神、目的語は「私た

92 エフェ2:3聖書協会共同訳「神の怒りを受けるべき子 τέκνα…ὀργῆς」に基づく。ただし、聖書協会共同訳の欄外別訳「怒りの子」が直訳。

93 I テサ2:16、II テサ2:10。

94 前者はI テモ1:15、4:16、後者は2:4、15。

95 順に、I テモ1:15、4:16。

96 順に、前者はI テモ1:15、4:16、後者は2:4、15。聖書協会共同訳は、1:15の ἁμαρτωλοὺς を「罪人」と訳す。2:15の目的語については、2:14の「アダμ Ἀδὰμ」と「女 ἡ γυνή」の対照から「エバ Εὔα」(2:13)を指すと解す可能性があるようにも思うが、論者の知る限り「エバ Εὔα」を支持する解釈は認められない。

97 前者はI テモ2:4、後者は2:15。前者は「神の裁きから」、後者は「罪から」とも解し得る。

98 前者はII テモ1:9、後者は4:18。後者の主語はὁ κύριος であるが、4:1、4:8から、ここでの主をイエスと解す。

99 順に、II テモ1:9、4:18。

100 前者は「天の国への」とも解し得る。

101 テト3:5。

ち」である。また、状況変化は、「罪から」あるいは「神の裁きから」である。

ヘブライ人への手紙の用例も能動形の2例のみで、意味上の主語は、神、イエスが1例ずつ¹⁰²、目的語は、「彼（＝イエス）」、「彼（＝イエス）を通して神のところへ来る人々」である¹⁰³。また、状況変化は、前者が「死から」、後者が「罪から」あるいは「神の裁きから」である。

ヤコブの手紙の5の用例も全て能動形で、主語は、言葉¹⁰⁴、信仰、神、祈り、「罪人を立ち帰らせる者」である¹⁰⁵。目的語は、「あなたがたの魂」、「その人」、人全般、「弱っている人」、「罪人の魂」が1例ずつである¹⁰⁶。また、状況変化は、「死から」が2例¹⁰⁷、「神の裁きから」、「滅びから」、「病から」が1例ずつである¹⁰⁸。

ペトロの手紙一の2の用例は、能動形、受動形、それぞれ1例である¹⁰⁹。能動形の主語は洗礼、受動形の意味上の主語は神である。目的語は、前者が「あなたがた」、後者が「正しい人」である。また、状況変化は、前者が「天の国への」、後者が「神の裁きから」である。

ユダの手紙の用例は能動形の2つのみで、主語は、イエス、「あなたがた」が1例ずつ¹¹⁰、目的語は、前者が「民（＝イスラエル）」、後者が「ある人たち」である¹¹¹。また、状況変化は、前者が「エジプトの地から」、後者が「火から」である。

102 順に、ヘブ5:7、7:25。両者ともσώζειν（現在不定詞）である。

103 前者はヘブ5:7、後者は7:25。

104 τὸν λόγονを聖書協会共同訳は「御言葉」と訳す。

105 順に、ヤコ1:21、2:14、4:12、5:15、20。ἐπιστρέψαςを聖書協会共同訳は「連れ戻す」と訳す。

106 順に、ヤコ1:21、2:14、4:12、5:15、20。

107 ヤコ1:21、5:20。ただし、1:21は「神の裁きから」とも解し得る。

108 順に、ヤコ2:14、4:12、5:15。ただし、4:12は「神の裁きから」とも解し得る。

109 前者はI ペト3:21、後者は4:18。

110 前者はユダ5、後者は23。前者はΙησοῦςであるが、聖書協会共同訳は「主」と訳す。

111 聖書協会共同訳は後者の目的語を「火の中にいる人たち」と訳す。しかし、私見では、これでは原文の「ある人たちοὗς」が3回連続する構文（22-23節）を見えなくするように思われる。

これらの106の用例の主語について集計してみると、能動形51の用例の中では、多い順に、イエスが19例、人全般、「あなたの信仰」が7例、神が6例、パウロが2例、エリヤ、妻、夫、テモテ、言葉、信仰、「祈り」、「罪人を立ち帰らせる者」、洗礼、「あなたがた」が、1例ずつである。

一方、受動形55の用例の中で、主語として圧倒的に多いのは神で40例、続いてイエスが14例、他は希望が1例である¹¹²。

106の用例全体では、主語は神が46例、イエスが33例であり、この両方で79例となり、全体に占める割合は74.52%、およそ4分の3に及ぶ。なお、能動形も受動形も神が主語である用例を欠くのはユダの手紙のみである一方、コリントの信徒への手紙一、二、エフェソの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙一、二、テトスへの手紙、ヤコブの手紙、ペトロの手紙一の8つの文書では、能動形も受動形もイエスが主語である用例を欠く。

次に、目的語について集計してみると、能動形51の用例の中では、多い順に、イエスが10例、命が6例、「長血の女」、他人が3例、「私たち」が2例の他は、1例のみの用例が27種と多岐に渡る。一方、受動形55の用例の中では、多い順に、人全般が9例、「私たち」が5例、「長血の女」、「最後まで耐える者」、「誰」、「全ての人」が3例ずつ、「ヤイロの娘」、「主の名を呼び求める者」が2例ずつの他は、1例のみの用例が25種と、こちらも多岐に渡る。

さらに、状況変化について集計してみると、能動形51の用例の中では、「死から」が24例で半数近くを占め、「神の裁きから」が9例で続く。さらに、「病から」6例、「罪から」および「天の国への」が4例ずつで、他は「この時（＝イエスが十字架で死ぬ時）から」、「滅びから」、「エジプトの地から」、「火から」が1例ずつである。

これらの項目の中で、「死から」、「病から」、「罪から」、「この時（＝イエスが十字架で死ぬ時）から」、「エジプトの地から」、「火から」を現在および近い将来に起こることに分類し、「神の裁きから」、「天の国への」、「滅びから」を

112 ただし、註85参照。

終末に起こることに分類し得るならば、前者は37例、後者は14例となる。

一方、受動形55の用例では「神の裁きから」が28例で過半数を占め、「天の国への」の8例、「病から」の6例が続く。さらに、「死から」が5例、「神の怒りから」が3例¹¹³、「永遠の命への」が2例で、他は「罪から」、「悪霊から」、「この歪んだ時代から」が1例ずつである。

こちらも、これらの項目の中で、「死から」、「病から」、「罪から」、「悪霊から」、「この歪んだ時代から」を現在および近い将来に起こることに分類し、「神の裁きから」、「神の怒りから」、「天の国への」、「永遠の命への」を終末に起こることに分類し得るならば、前者は14例、後者は41例となる。

106の用例全体では「神の裁きから」が37例で最多であり、「死から」の29例、「病から」および「天の国への」の12例が続く。「罪から」は5例である。先ほどの分類に従えば、現在および近い将来に起こることに分類し得る用例は51例、終末に起こることに分類し得る用例は55例となり、用例数は、ほぼ拮抗する。

なお、四つの福音書の受難物語（エルサレム入城以降、埋葬の前まで）におけるσφζωの用例数と各福音書の用例に占める割合を集計してみると、マタイ福音書6例（40%）、マルコ福音書5例（33.3%）、ルカ福音書4例（23.5%）、ヨハネ福音書2例（33.3%）である¹¹⁴。さらに、十字架と死の場面に限れば、マタイ福音書4例（26.6%）、マルコ福音書3例（20%）、ルカ福音書4例（23.5%）、ヨハネ福音書0例である¹¹⁵。従って、頻度から言えば、受難物語においてσφζωの用例が特別に目立つとまでは言い得ないであろう。

一方、マタイ福音書およびルカ福音書のクリスマス物語におけるσφζωの用例数と各福音書の用例に占める割合を集計してみると、マタイ福音書1例

113 ロマ5:9は文言としては「怒りから」であるが、文意から「神の怒りから」に含める。註92をも参照。

114 受難物語の範囲を、ここではマタ21:1-27:56、マコ11:1-15:41、ルカ19:28-23:49、ヨハ12:12-19:37とする。

115 「十字架と死の場面」を、ここではマタ27:32-56、マコ15:21-41、ルカ23:26-49、ヨハ19:17-37とする。

(6.6%)、ルカ福音書0例である¹¹⁶。

3-2 σωτηρία

マコ16:8異読の1例を含む新約聖書の用例46の中で、主格は8例、属格は20例、対格は18例であり、与格の用例を欠く。主格の用例が認められるのは、ルカ福音書、ヨハネ福音書、使徒言行録がそれぞれ1例、ローマの信徒への手紙2例、ヨハネの黙示録3例に限られ、ルカ福音書1例を除く他の7例は全て定冠詞付きである¹¹⁷。属格、対格については用例が比較的広範な文書に及ぶ¹¹⁸。

マルコ福音書の用例は属格の1例のみで、「永遠のαἰωνίου」と共に、「ケリュゲマ」を修飾する¹¹⁹。

ルカ福音書の4例の中で、主格は1例で、定冠詞無しで現れる。属格は2例で、それぞれ「角κέρας」、「知識γνῶσιν」を修飾し、対格は1例で、「我らの敵からのἐχθρῶν ἡμῶν」が後続する¹²⁰。

ヨハネ福音書の用例は主格の1例のみで、定冠詞付きである¹²¹。

使徒言行録の6例の中で、主格は1例で定冠詞付き、属格は3例で、最初の二つは、それぞれ「言葉ὁ λόγος」、「道ὁ δὸν」を修飾し、三つ目は前置詞πρὸςに後続し、「あなたὕμετέρας」によって修飾される¹²²。残りの2例は対格で、一つは定冠詞も修飾語も無しで現れ、もう一つは定冠詞無しで前置詞εἰςに後続す

116 クリスマス物語の範囲を、ここではマタ1:18-2:18、ルカ1:5-2:40とする。

117 Nestle-Aland, *Novum Testamentum Graece* 28thにはルカの用例(19:9)について、定冠詞付きの異読は認められない。

118 新約聖書の中でσωτηρίαの用例が認められる16文書の中で、属格の用例を欠くのはヨハネ福音書、ローマの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙二、ペトロの手紙二、ヨハネの黙示録の五文書、対格の用例を欠くのは、マルコ福音書、ヨハネ福音書、エフェソの信徒への手紙、テサロニケの信徒への手紙一、ユダの手紙、ヨハネの黙示録の六文書である。

119 マコ16:8異読。聖書協会共同訳はκήρυγμαを「福音の言葉」と訳す。

120 順に、主格はルカ19:9、属格は1:69, 77、対格は1:71。聖書協会共同訳は1:77γνῶσινの部分「救いを知らせる」と訳す。

121 ヨハ4:22。

122 順に、主格は使徒4:12、属格は13:26、16:17、27:34。

る¹²³。

ローマの信徒への手紙の5例の中で、主格は2例でいずれも定冠詞付き¹²⁴、残りの3例は対格で、いずれも定冠詞無しで前置詞εἰςに後続する¹²⁵。

コリントの信徒への手紙二の4例は、属格が3例、対格が1例である¹²⁶。属格の一番目はὕπὲρに後続し、残りの二つは「日 ἡμέρα」を修飾する。一方、対格の1例は定冠詞無しで前置詞εἰςに後続する。

エフェソの信徒への手紙の用例は属格の1例のみで、「福音 εὐαγγέλιον」を修飾し、「あなたがた ὑμῶν」によって修飾される¹²⁷。

フィリピの信徒への手紙の3例は、属格が1例で、「しるし ἐνδείξεις」を修飾し¹²⁸、残りの2例は対格で、一つは定冠詞無しで前置詞εἰςに後続し、もう一つは「自分たちの ἑαυτῶν」によって修飾される¹²⁹。

テサロニケの信徒への手紙一の用例は、いずれも属格の2例で、それぞれ「希望 ἐλπίδα」、「獲得 περιποίησις」を修飾する¹³⁰。

テサロニケの信徒への手紙二の用例は対格の1例のみで、定冠詞無しで前置詞εἰςに後続する¹³¹。

テモテへの手紙二の2例は、属格と対格が1例ずつで¹³²、前者は「キリスト・イエスにある τῆς ἐν Χριστῷ Ἰησοῦ」によって修飾され、属格目的語の用法である¹³³。一方、後者は定冠詞無しで前置詞εἰςに後続する。

123 順に使徒7:25、13:47。

124 順にロマ11:11、13:11。後者のみ ἡμῶνを伴う。

125 順にロマ1:16、10:1、10。

126 順に、属格はⅡコリ1:6、6:2の2つ、対格は7:10。

127 エフェ1:13。

128 フィリ1:28。

129 順に、フィリ1:19、2:12。

130 順に、Ⅰテサ5:8、9。聖書協会共同訳はπεριποίησιν σωτηρίας（直訳「救いの獲得」）を「救いを得る」と訳す。

131 Ⅱテサ2:13。

132 属格はⅡテモ2:10、対格は3:15。

133 τύχωσιν (τυγχάνω「獲得する」接続法アオリスト3人称複数形) は属格を目的語に取る。

ヘブライ人への手紙の7例は、属格が4例、対格が3例である¹³⁴。属格の1番目は「無視する者たちἀμελήσαντες」を修飾し、「これほど大きなτηλικαύτης」によって修飾される¹³⁵。2番目は「創始者ἀρχηγόν」を修飾し¹³⁶、「彼らのαὐτῶν」によって修飾される。3番目は「源αἴτιος」を修飾し、「永遠のαἰωνίου」によって修飾される。4番目は属格目的語の用法である¹³⁷。対格の1番目は定冠詞も修飾語も無しで現れ、2、3番目は定冠詞無しで前置詞εἰςに後続する¹³⁸。

ペトロの手紙一の4例は、属格が1例、対格が3例で¹³⁹、属格の1例は前置詞περὶ、関係代名詞ᾧςに後続する。対格の1、3番目は定冠詞無しで前置詞εἰςに後続する¹⁴⁰。対格の2番目は「魂のψυχῶν」によって修飾される。

ペトロの手紙二の用例は、対格の1例のみで、定冠詞も修飾語も無しで現れる¹⁴¹。

ユダの手紙の用例は属格の1例のみで、前置詞περὶに後続するτῆς κοινῆς ἡμῶν σωτηρίας「私たちが共有する救い」の中に現れる¹⁴²。

ヨハネの黙示録の用例は、主格の3例で、いずれも定冠詞付きである¹⁴³。

なお、四つの福音書の受難物語（エルサレム入城以降、埋葬の前まで）は、σωτηρίαの用例を欠く¹⁴⁴。一方、マタイ福音書およびルカ福音書のクリスマス物語におけるσωτηρίαの用例数と各福音書の用例に占める割合を集計してみると、

134 順に、属格はヘブ2:3, 10、5:9、6:9、対格は1:14、9:28、11:7。

135 聖書協会共同訳はἀμελήσαντεςを「ないがしろにする」と訳す。

136 聖書協会共同訳は「導き手」と訳し、欄外註で別訳に「創始者」を挙げる。

137 ἐχόμενα (ἔχω「持つ」現在分詞中動形中性複数形対格) は属格を目的語に取ることがある。

138 ヘブ11:7では、「彼の家のτοῦ οἴκου αὐτοῦ」によって修飾される。聖書協会共同訳はσωτηρίαν τοῦ οἴκου αὐτοῦを「家族を救う」と訳す。

139 順に、属格はI ペト1:10、対格は1:5、9、2:2。

140 ただし、I ペト1:5では、「終わりの時に現れるように準備されているἐτοιμῶν ἀποκαλυφθῆναι ἐν καιρῷ ἐσχάτῳ」によって修飾される。

141 II ペト3:15。

142 ユダ3。聖書協会共同訳はτῆς κοινῆς ἡμῶνを「私たちが共にあずかっている」と訳す。

143 順に黙7:10、12:10、19:1。

144 受難物語の範囲については註113を参照。

マタイ福音書0例、ルカ福音書3例（75%）である¹⁴⁵。

3-3 σωτήριον

新約聖書の4例の中で、主格は1例、属格も1例、対格は2例で、いずれも定冠詞付きである。与格の用例を欠く。

ルカ福音書の用例は、対格の2例で、前者は「あなたのσου」、後者は「神の τοῦ θεοῦ」によって修飾される¹⁴⁶。

使徒言行録の用例は主格の1例のみで、前から「このτοῦτο」、後ろから「神の τοῦ θεοῦ」によって、それぞれ修飾される¹⁴⁷。

エフェソの信徒への手紙の用例は属格の1例のみで、「兜περικεφαλαίαν」を修飾する¹⁴⁸。

なお、四つの福音書の受難物語（エルサレム入城以降、埋葬の前まで）は、σωτήριονの用例を欠く¹⁴⁹。一方、マタイ福音書およびルカ福音書のクリスマス物語におけるσωτήριονの用例数と各福音書の用例に占める割合を集計してみると、マタイ福音書0例、ルカ福音書1例（50%）である¹⁵⁰。

前項で分析した女性名刺σωτηρίαと本項で分析した中性名詞σωτήριονの意味上の差異については、σωτηρίαが「抽象名詞」である一方、σωτήριονが「具体的な事柄を指す中性語尾-ionがついている」という指摘がある¹⁵¹。

145 クリスマス物語の範囲については註115を参照。なお、そもそもマタイ福音書は、σωτηρίαの用例を欠く。

146 順に、ルカ2:30、3:6。なお両者とも動詞はὁράω「見る」の変化形（前者はアオリスト形3人称複数εἶδον、後者は未来形3人称単数ὀψεται）である。

147 使徒28:28。

148 エフェ6:17。

149 受難物語の範囲については註113を参照。

150 クリスマス物語の範囲については註115を参照。なお、そもそもマタイ福音書は、σωτήριονの用例を欠く。

151 田川建三『新約聖書 訳と註2下 使徒行伝』作品社、2011年、672頁。田川は同上書84頁で使徒28:28 τὸ σωτήριονを「救いの賜物」と訳す。田川建三『新約聖書 訳と註2上 ルカ福音書』作品社、2011年、141頁も参照。そこではσωτήριονを「『救い』という抽象概念ではなく、それが具体的に一つの事柄となって提供されているもの」だと説明する一方

3-4 σωτήρ

新約聖書の用例24の中で、主格は4例、属格は14例、与格は2例、対格は4例である。

ルカ福音書の2例は、主格、与格が1例ずつである¹⁵²。主格は定冠詞無しで現れる。与格は前置詞ἐπὶに後続するτῷ θεῷ τῷ σωτήρί μου「私の救い主、神」の中に現れる¹⁵³。

ヨハネ福音書の用例は主格の1例のみで、定冠詞付きで、「世の τοῦ κόσμου」によって修飾される¹⁵⁴。

使徒言行録の用例は対格の2例で¹⁵⁵、前者は「創始者 ἀρχηγόν」と同格¹⁵⁶、後者は「イエス Ἰησοῦν」と同格である。

エフェソの信徒への手紙の用例は主格の1例のみで、定冠詞無しで、「その体 τοῦ σώματος」によって修飾される¹⁵⁷。

フィリピの信徒への手紙の用例は対格の1例のみで、「主イエス・キリスト κύριον Ἰησοῦν Χριστόν」と同格である¹⁵⁸。

テモテへの手紙一の用例は、主格が1例、属格が2例である¹⁵⁹。主格は、「全ての人たち、特に信じる人たちの πάντων ἀνθρώπων μάλιστα πιστῶν」によって修飾され、「生ける神 θεῷ ζῶντι」を修飾する。属格の前者は「私たちの救い主、神の θεοῦ σωτήρος ἡμῶν」の中に、後者は前置詞 ἐνώπιον に後続する「私たちの

で、「しかし実質的には単に『救い』と言っているのと同じだし、著者自身も区別している様子」もないので、「敢えて訳語上区別する必要もない」とも述べる。実際、田川は σωτήριον について、エフェ6:17では単に「救い」と訳す。田川建三『新約聖書 訳と註4 パウロ書簡 その二／擬似パウロ書簡』作品社、2009年、71頁。

152 主格はルカ2:11、与格は1:47。

153 τῷ θεῷ と τῷ σωτήρί μου は同格である。

154 ヨハ4:42。

155 順に、使徒5:31、13:23。

156 聖書協会共同訳は「導き手」と訳す。ヘブ2:10では欄外註で別訳に「創始者」を挙げが、ここでは別訳を付さない。註135をも参照。

157 エフェ5:23。

158 フィリ3:20。

159 順に、主格はIテモ4:10、属格は1:1、2:3。

救い主、神^α τοῦ σωτήρος ἡμῶν θεοῦ」の中に、それぞれ現れる。σωτήρが神のみに当てられている点が、特徴的であると言い得よう¹⁶⁰。

テモテへの手紙二の用例は属格の1例のみで¹⁶¹、前置詞διὰに後続する「私たちの救い主、キリスト・イエスの現われ^α τῆς ἐπιφανείας τοῦ σωτήρος ἡμῶν Χριστοῦ Ἰησοῦ」の中に現れる。

テトスへの手紙の用例は6例で、全用例24の4分の1を占める¹⁶²。6例全て属格で、神に当てた用例、イエスに当てた用例が3例ずつ交互に現れる¹⁶³。

ペトロの手紙二の5例は、全て属格で、イエスにのみ当てられる¹⁶⁴。「私たちの神であり救い主^α τοῦ θεοῦ ἡμῶν καὶ σωτήρος」あるいは「私たちの主であり救い主^α τοῦ κυρίου ἡμῶν καὶ σωτήρος」という二重の修飾語が全ての用例に現れるのが一つの特徴と言い得よう¹⁶⁵。

ヨハネの手紙一の場合、用例は対格の1例のみでイエスに当てられ、「世の^α τοῦ κόσμου」によって修飾され、「御子^α τὸν υἱὸν」と同格である¹⁶⁶。

ユダの手紙の用例は与格の1例のみで神に当てられ、「私たちの^α ἡμῶν」によって修飾され、「唯一の神^α μόνῳ θεῷ」と同格で、「私たちの主であるイエス・キリストによって^α διὰ Ἰησοῦ Χριστοῦ τοῦ κυρίου ἡμῶν」が後続する¹⁶⁷。

160 同じく「ユダの手紙」もσωτήρが神にのみ当てられている。σωτήρが神とイエスの両方に交互に当てられているケースについては、本項の後続の「テトスの手紙」の部分、イエスにのみ当てられているケースについては同じく「ペトロの手紙二」、「ヨハネの手紙一」の部分参照。

161 IIテモ1:10。

162 順に、テト1:3, 4、2:10, 13、3:4, 6。

163 前者はテト1:3、2:10、3:4、後者は1:4、2:13、3:6。「救い主である神」と「救い主であるイエス・キリスト」のセットが3つ現れると解することもできよう。

164 IIペト1:1, 11、2:20、3:2, 18。ただし、3:2は明示的でないため神とも解し得る。田川建三『新約聖書 訳と註6 公同書簡／ヘブライ書』作品社、2015年、376頁は「もしかすると神を指すのかもしれない」と言いながら、「やはり『主イエス…』ということか」と述べる。

165 前者はIIペト1:1、後者は1:11、2:20、3:2, 18。ただし、2:20、3:2は「主であり救い主^α τοῦ κυρίου καὶ σωτήρος」で「私たちの^α ἡμῶν」を欠く。

166 Iヨハ4:14。

167 ユダ25。

なお、四つの福音書の受難物語（エルサレム入城以降、埋葬の前まで）は、σωτήρの用例を欠く¹⁶⁸。一方、マタイ福音書およびルカ福音書のクリスマス物語におけるσωτήρの用例数と各福音書の用例に占める割合を集計すれば、マタイ福音書0例、ルカ福音書2例（100%）である¹⁶⁹。

3-5 σωτήριος

新約聖書の用例は、テトスへの手紙の1例のみで、主格で現れ、「神の恵みή χάρις τοῦ θεοῦ」を修飾する¹⁷⁰。

4. ここまでの考察に基づく今後の課題

本論では、新約聖書における「救い」について、σώζωに関連する五語に絞って考察を試みた。動詞σώζωの分析に相当な労力を要する中で、未だ結論的なことを述べる段階には至っていないと言わざるを得ない。今後、σώζωについて、また、本論で分析対象とした他の四語について、更なる分析、考察に取り組んで行く予定である。

その中で、これから述べることは、なお仮説の域を出ないが、σώζωの分析の中で触れたように、σώζωの106の用例全体の中で、「現在および近い将来に起こることと分類し得る用例は51例、終末に起こることと分類し得る用例は55例となり、用例数は、ほぼ拮抗する」という知見は、本論の「はじめに」で触れた「果たして新約聖書の示す『救い』が、現代を生きる我々にとって、どのような助けになるのかについての考察を深めていく」上で、一つの重要な切り口になり得るように思われる。すなわち、新約聖書の語る「救い」は、用例数という観点から言えば、必ずしも終末に強い傾きを持つものではなく、むしろ、切

168 受難物語の範囲については註113を参照。なお、そもそもマタイ福音書、マルコ福音書は、σωτήρの用例を欠く。

169 クリスマス物語の範囲については註115を参照。

170 テト2:11。

迫した状況を含む現在および近い将来という状況における用例が、終末における用例と均衡するのである。

もちろん、新約聖書が語る究極的な「救い」は「終末における救い」であり、それは、イエスの十字架によって成し遂げられ、終末において完成されるものであることは確かである。しかしながら、究極に至る前の、日常生活における「救い」、特に生活上の困難という状況における「救い」を「前味」として味わいながら、究極の救いを待つ姿勢こそが、新約聖書が語る「救い」に則した生活スタイルなのではなかろうか。日々の生活の中で味わう「救い」の喜びこそが、信仰生活を「究極に至るまでの終わりの見えない我慢大会」から解放し、日々を「生き生きと生きる」力の源泉となるのではなかろうか。

この仮説の検証は、更なる分析と考察を必要とするものであるが、もし、こうした仮説が妥当するのであれば、キリスト教が告げ知らせるべき「救い」についての語り口および勧めるべき生活スタイルに、一つの方向性を得られるように思われる。